

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	アトピー性皮膚炎をもつ思春期の子どものスキンケア継続力獲得に向けた看護介入
作成者（著者）	大屋, 晴子
公開者	東邦大学
発行日	2019.09
掲載情報	東邦大学大学院看護学研究科 博士論文 内容の要旨及び審査結果の要旨. 67.
資料種別	学位論文
内容記述	主査：出野慶子 / タイトル：アトピー性皮膚炎をもつ思春期の子どものスキンケア継続力獲得に向けた看護介入 / 著者：大屋晴子 /
著者版フラグ	none
報告番号	32661甲第970号
学位授与年月日	2019.09.26
学位授与機関	東邦大学
メタデータのURL	https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD28183964

博士學位論文

論文内容の要旨

および

論文審査の結果の要旨

東邦大学

博士論文要旨

看護学研究科看護学専攻 基盤・実践看護学 分野	学籍番号 ND12001 氏名 大屋 晴子
論文題目	アトピー性皮膚炎をもつ思春期の子どものスキンケア継続力獲得に向けた看護介入
<p>【研究背景】アトピー性皮膚炎（Atopic Dermatitis, 以下 AD と略す）は、乳幼児期に発症することが多く、増悪・寛解を繰り返し、掻痒のある湿疹を主病変とする慢性再発性炎症性皮膚疾患である。学童期以降は寛解や症状改善がみられるが、思春期まで症状がみられる場合には難治性であることが多い。また、思春期の子どもは治療の中断や症状悪化時のみの受診が多く問題視されている。乳幼児期から長期にわたりスキンケアは実施しているものの、スキンケアの知識や技術の根拠が曖昧なことや学校生活を考慮した方法ではないことから、スキンケアを継続できない状況にある。そこで、従来の医療者からの一方的な説明や指導ではなく、AD をもつ思春期の子どもが主体的にスキンケアを継続できる看護介入の検討が重要であると考えた。</p> <p>【研究目的】AD をもつ思春期の子どものスキンケア継続力獲得に向けた看護介入を検討する。</p> <p>【用語の操作的定義】本研究におけるスキンケア継続力とは「自己のスキンケアの実践状況を振り返り皮膚症状の改善・維持に向けて実施可能な目標を設定してスキンケア実践を繰り返す力」とした。</p> <p>【研究方法】</p> <ol style="list-style-type: none">1. 研究デザイン：縦断的介入研究2. 対象者：AD をもつ小学 5 年生～中学 3 年生の 8 名(男子 5 名、女子 3 名)で、皮膚科クリニックに通院中の子ども3. 方法：6 か月間に 3 回の介入をクリニック受診の待ち時間に実施。①介入 1 回目：スキンケアの根拠を中心とした PC 学習、観察学習（外用薬の塗布方法、石鹸の泡立て方）実施後に、これまでのスキンケア内容の具体的な振り返り、「今日からできる目標」の設定。②介入 2 回目：目標に対する実践の振り返り（実施できたこと・できなかったこと、およびその理由）、「今日からできる目標」の設定。③介入 3 回目：目標に対する実践の振り返り、「今日からできる目標」の設定。ベースラインおよび終了時に基本調査、スキンケアに関する知識と技術の自己確認、自己効力感測定を実施。各介入時に症状の自己評価（乾燥・発赤・掻痒部位にシールを貼付）を実施。4. 分析方法：ベースラインおよび終了時調査は、介入前後の比較を行った。症状の自己評価は対象者別に経過を分析した。実践内容は面談シートの記録から個別分析、全体分析を行った。 <p>【倫理的配慮】対象者と保護者に研究趣旨などを口頭および文書で説明し、同意書にて同意を得た。東邦大学看護学部倫理審査委員会（承認番号 28014）の承認を得て実施した。</p> <p>【結果】</p> <ol style="list-style-type: none">1. スキンケアの知識・技術の自己確認および PC 学習、観察学習 知識の自己チェックでは、8 名中 7 名が「知らない」「あまり知らない」と回答した項目が 4 項目（全 15 項目）以上あったが、介入終了時には全員が「知っている」「ほとんど知っている」と回答した。また、技術の自己チェックでは、8 名中 5 名が 2 項目以上（全 9 項目）で「できない」「あまりできない」と回答していたが、終了時には 2 名が「あまりできない」と回答した項目が 1 つのみとなった。介入 1 回目時の「今日からできる目標」設定では、PC 学習や観察学習を踏まえ	

た「外用薬の広げ方」「かゆいときに冷やす」「石鹸の泡立て方」など、これまで実施したことのない新たな内容を掲げることができていた。

2. スキンケア実践の振り返り

1回目の介入では、これまでのスキンケア実践を想起できるような声かけによって、具体的な実践内容やスキンケアに対する思いを引き出すことができたが、困難なことが中心であり、実施できていることには気づきにくかった。2回目の介入では、目標に対して実施できた内容・できなかった内容およびその理由について尋ねたところ、登校前に外用薬を塗布する時間確保のため起床時間を早める、学校でも塗布できるように外用薬を持参できるように工夫する、クラブ活動での発汗が悪化要因なので汗拭きタオルを学校に持参するなど、生活時間の調整や、学校生活に合わせた工夫について着目することができ、「今日からできる目標」として掲げることができた。3回目の介入では、「スキンケアはどうでしたか？」の問いかけだけで、主体的に実践の振り返りができるようになっており、実施できた要因・実施できなかった要因を検討することができ、振り返りをふまえた見直しや修正ができた。

3. 実施可能な「今日からできる目標」の設定

実践の振り返りをふまえて、対象者全員が全介入時において、達成する自信が80%以上の内容を実施可能な目標として設定し、達成度は60点～100点であった。

【考察】

1. スキンケア実践の自己評価

スキンケアに関する知識と技術の自己確認およびPC学習・観察学習は、自己のスキンケアに関する曖昧な知識や技術に自ら気づくとともに、スキンケア実践に必要な根拠を理解することにつながったと考えられる。そして、これらは、スキンケア実践を具体的に振り返り、スキンケアに影響する要因を考えることや実施可能な目標設定には不可欠な要素である。

2. スキンケアに影響する要因をふまえた修正に対する支援

1回目の介入では、対象者の漠然とした発言に対して、スキンケアの時間や場面、どのように行っているのかを問いかけたことで、現在のスキンケアの具体的な内容に自ら気づくことができていた。2回目の介入は、前回の目標に対して、実施できたか否かだけでなく、その要因を考えることができるように促したことで、スキンケアに影響する要因を考えられ、自分の症状や生活に合わせた、次への対策につながっていた。3回目の介入では、対象者が自ら実施状況とその要因を考えて発言できしており、これは、1回目と2回目の介入において、実践の具体的な振り返りの方法を体験したことによるものと考えられる。対象者の状況をふまえて、段階的に3回の介入を行うことで、自分が設定した目標に対して、主体的に自己の振り返りができたと考えられる。

3. 実施可能な目標を自己決定する支援

対象者全員が実践の振り返りによるスキンケアの見直しや修正ができたことで、目標設定時点で、達成する自信が80%以上の内容を「今日からできる目標」として設定できていた。目標達成日が「今日」ということは対象者にとっては、大きな目標ではなく確実に実施可能な目標でよいと考えることで、負担に感じず、かつ明確な目標設定であったといえる。実施可能な目標を設定することで、実施できた体験が成功体験の積み重ねとなり、実施できなかった内容に対しても否定的に受け止めずに前向きにとらえ、次の対策を試みることができていたと考えられる。

【結論】思春期の特徴および対象者の状況をふまえた、3回の段階的な介入を行ったことにより、自己のスキンケア実践を「気づく」「考える」「試みる」の一連の過程を繰り返す介入がスキンケア継続力の獲得につながった。

博士学位論文審査結果の要旨

学籍番号：ND12001（基盤・実践看護学分野）

氏名：大屋 晴子

論文題目：アトピー性皮膚炎をもつ思春期の子どものスキンケア継続力獲得に向けた看護介入

審査日時：2019年9月10日 13:00～14:20

審査場所：409 セミナー室

審査委員：主査 出野慶子教授 副査 福島富士子教授、伊藤桂子教授

本研究は、アトピー性皮膚炎（以下、AD とする）をもつ思春期の子供のスキンケア継続力獲得に向けた看護介入を実施し、その有用性について検討したものである。

AD をもつ思春期の子どもにおいては、治療の中断や症状悪化時のみの受診であることが問題視されているものの、これまでこの年代の子どもへの看護支援については、ほとんど研究されていない。本研究は、思春期の子どもだからこそ可能であるスキンケアの根拠の理解、自己のスキンケアの振り返り、「今日からできる目標」を自己決定する力、目標に対して実施できた理由・できなかった理由を考えて改善策を試みる力を踏まえた介入であり、独創性のある研究として評価できる。小学5年生から中学3年生の8名の研究参加者が、約2か月ごとの皮膚科通院時における3回の段階的介入によってスキンケア実践の状況に変化がみられ、AD 症状も改善したという結果は興味深く、スキンケア継続力の獲得に向けた介入として有用であったといえる。

また、思春期の子どもの特性を踏まえたうえで「気づく」「考える」「試みる」の一連の過程を子どもが繰り返せるような看護介入を意識して行うことで、スキンケア継続力の獲得が期待できることから、思春期の子どもが通院するクリニック等においても特別なトレーニングを必要とせず、診察の待ち時間等を利用して実施可能であり、地域でも広く活用できることが期待される。

審査の過程においては、思春期の子どもならではの介入方法であることがわかるように、考察の構成を修正すること、ならびに考察の小見出しを適切に修正すること等が指摘された。また、分析方法の記述が曖昧な部分があるため、方法を明記すること等が指摘され、これらを加筆修正して論文を提出することが求められた。

以上より、博士論文審査会において論文審査ならびに最終試験は合格であるとした。